

地域に根付く新たな空間の創造方式の探究

－ 愛知県足助町を対象として －

日大生産工（院） ○伊藤 優太 日大生産工 仙波 宏章
日大生産工 篠崎 健一

1. はじめに

豊田市足助町は、江戸時代から旧伊那街道の中継地として栄え、川と街道を中心に形成されてきた在郷町である。川側には建物が密集して建ち並び、生活空間が川に溢れ出す魅力的な空間がある。足助町は景観保存のため、以下の図（Fig. 1）のように景観形成ゾーンに分け、修景・保存を行っている。しかし、川側は景観の変化が大きく、さらに複数の景観的まとまりに分類できると推察される。本研究は、川側空間を対象に景観に影響する要素を調査し、景観的まとまりを考察すると共に川側の空間構成と修景・保存の実態を把握し、問題と原因を探究することを目的とする。その結果を基に修士設計を行う。

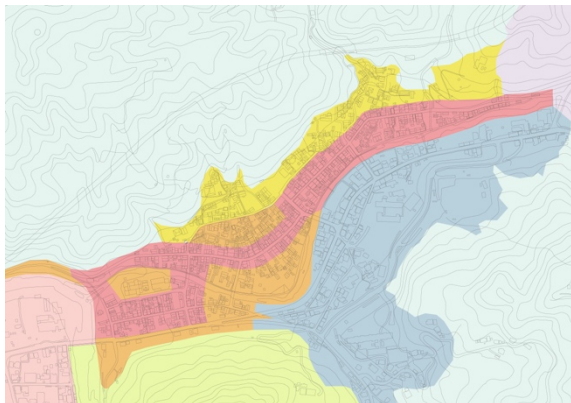


Fig. 1 景観形成ゾーンの区分

2. 豊田市足助町とは

足助は、愛知県の北東部の山間部に位置し、物流の中継地であったため、宿場商業町として発展した。そのため、街道側に店舗となる主屋があり、裏の山側、川側には付属屋や蔵が配置された商家が多く見られる。足助の町並みには、現在も旧街道沿いを中心に町屋建築が残っており、地形や自然環境に寄り添い形成された独特な景観がある。Fig. 2に足助の全景、川側空間を示す。また、住

民の町並み保存の意識が高く、1975年から足助の町並みを守る会が発足され、様々な取り組みで景観を守ってきた。現在までに、伝統的建造物群保存対策調査が2回行われ、2012年に重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。



Fig. 2 航空写真・川側空間

3. 研究方法

研究の流れを以下に示す。①実地調査の作業を通して、足助の空間構成、実態、状況を知る。②屋根伏図、川側立面図、外構図の作成し、空間構成の重要な要素となっている部分を図面にプロット・集計を行う。③景観的まとまり、まちの現状・問題を考察する。

3. 1 対象範囲

足助川に面した区画を調査範囲（Fig. 3）とし、調査を行った。

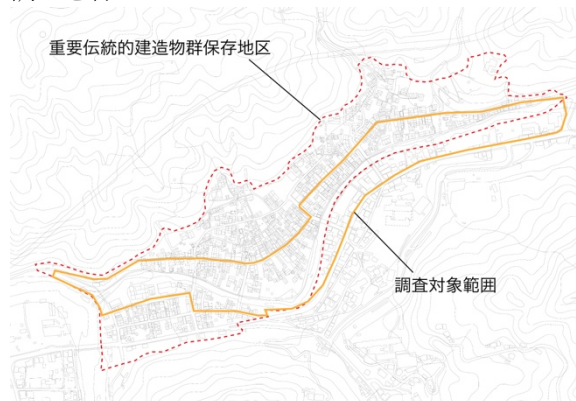


Fig. 3 調査対象範囲

Exploration of Creation Method of New Space Rooted in Region

－ Targeting Asuke-cho, Aichi Prefecture －

Yuta ITO, Hiroaki SENBA and Kenichi SHINOZAKI

3. 2 実地調査

実地調査は、2017年6月4日～9日、8月16日～24日の2回に渡り計15日間で行った。川側の立面図と屋根伏図を作成し、川側空間の景観に影響を与えていると考えられる屋根、畑、石垣、道などの要素を決め、ヒアリング・外構確認・実測など調査を行った。調査では、できるだけ住民の人とコミュニケーションをはかり、まちの内の実態を把握することを意識して行い、祭りなどの行事にも参加した。実地調査の具体的な内容としては、川側立面の写真撮影、石垣の寸法の計測、プロット、川側の階段のつき方、種類・空き家、空室 調査（ヒアリング+電気、ガスメーターの確認）、ナカドオリ（足助の家で多く見られる主屋と付属屋を繋げ、玄関から家の裏側までの抜け道）の確認、田口家/マンリン/両口屋/白久（本屋）/蕎麦屋の5軒は、家の奥まで確認した。

4. 結果

4. 1 川側空間の構成要素

町境界、駐車場、空き家、空室、緑地、町並み形成年代別、建物方向、道橋の年代別、抜け空間、建物の用途別ごとにプロット（Fig. 4）を行った。また、川側立面（Fig. 5）から空間構成の考察を石垣の高さ関係や建物のファサードなど行った。赤い点線は景観の変化が明確にわかる境界に引いたものである。

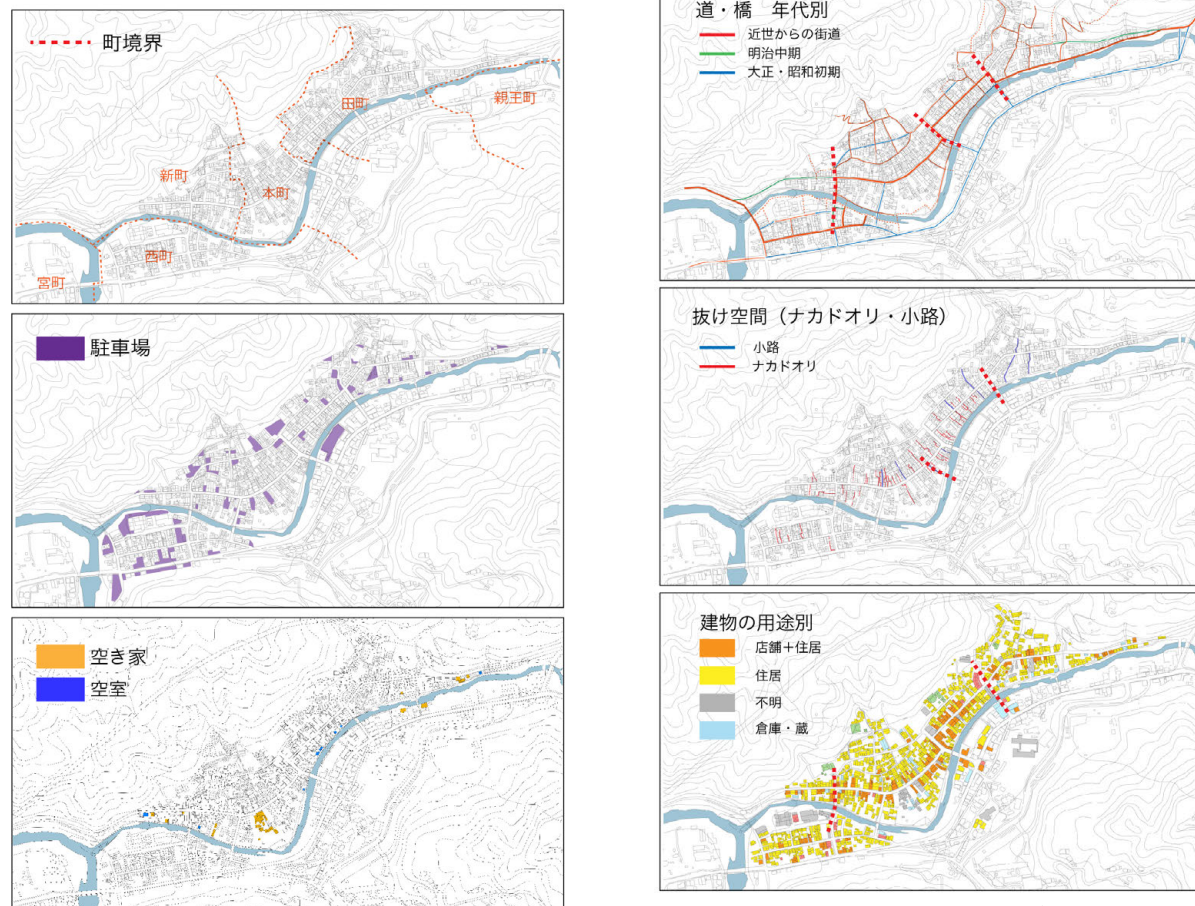


Fig. 4 構成要素 プロット図

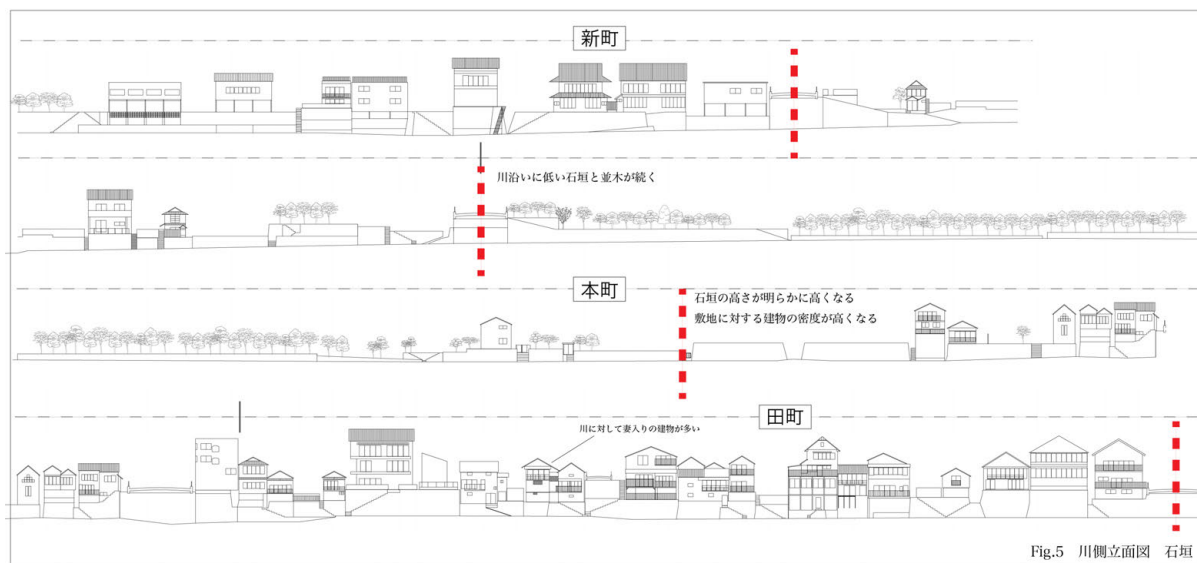


Fig. 5 川側立面図 石垣

4. 2 川側空間の景観的まとまり

調査の結果より、景観変化の境界線が重なる6つの景観的まとまりが推察される。(Fig. 6)

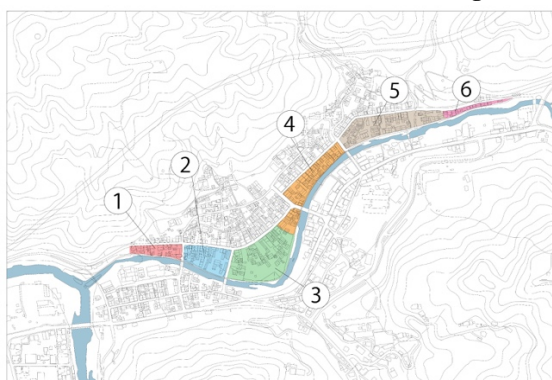


Fig. 6 川側空間の6つの景観的まとまり

	第1ブロック	第2ブロック	第3ブロック	第4ブロック	第5ブロック	第6ブロック
建物面積	1887㎡	2929㎡	4705㎡	5092㎡	4855㎡	916㎡
ブロック面積	3092㎡	5529㎡	13162㎡	7132㎡	10108㎡	1389㎡
建物が占める割合 %	61%	53%	36%	71%	48%	66%

川側に対して平・垂						
平側	5	3	4	8	13	13
垂側	1	5	2	16	2	0

川側の玄関数	1	4	3	0	9	0
--------	---	---	---	---	---	---

川面の建物の構造						
本造	7	9	7	26	10	10
S造	2	2	0	2	2	1
R造	0	0	0	1	0	0
SRC造	1	0	0	1	0	0
複数・不明	1	1	0	2	4	1

石垣の構造						
野面積み	2	6	3	2	3	2
打ち込み接ぎ・乱積み	2	4	3	4	2	5
打ち込み接ぎ・谷積み	0	1	4	4	1	2
打ち込み接ぎ・布積み	0	1	0	2	0	0
切り込み接ぎ・乱積み	0	0	0	1	1	0
切り込み接ぎ・谷積み	0	0	1	6	1	0
切り込み接ぎ・布積み	0	0	0	1	2	0
コンクリート	5	0	2	2	0	4

石造階段のタイプ						
Aタイプ	1	5	2	0	1	2
Bタイプ	0	0	0	1	0	0
Cタイプ	3	1	2	5	1	2
Dタイプ	0	2	0	6	0	0

川側の道 (種類)	遊歩道	遊歩道	遊歩道	遊歩道	旧伊勢街道	旧伊勢街道
-----------	-----	-----	-----	-----	-------	-------

建物と川の平均距離(m)	3.2m	7.3m	9.2m	2.8m		
遊歩道の平均幅員(m)	2.0m	2.6m	3.3m	1.4m		

Fig. 7 景観的まとまりごとの景観構成要素

まちの景観は、町界・字界ごとに町並みが揃っているのではなく、地形的要因、町並みの形成年代、土地所有の敷地割などの様々な要因により、複数の景観的まとまりができていていると考えられる。Fig. 7は、推察される6つの景観的まとまりごとに調査内容を記した表であり、それぞれ明確な空間構成の特徴を持つことが確認できる。

4. 3 景観的まとまりごとの特徴

1. 第1ブロック (新町 西側)

明治20年代終わりから大正にかけて、形成されたまちの中では、新しい区画である。それまでは、畑として主に利用されていた。護岸の石垣はその半分がコンクリート造で、建物の多くが川に対して平行に建っている。明治・大正に建てられた建物であるが、伝統的な形式が守られていて、足助の伝統的な空間の一部を担っている。川沿いの建物は、住居が主であるが、懸造りの工場や倉庫なども見られる。

2. 第2ブロック (新町 東側)

江戸時代からの敷地割、町並みが残る区画。街道から川の間に間口4間程の短冊状の敷地割がされ、主屋があり、付属屋がその後ろにつく家が多い。また、川と敷地の間には江戸時代から遊歩道があり、川側に玄関が見られる。川側階段は川の垂直方向につくタイプが多く、建物も川に対して垂直方向に建つものが多い。川から街道までの抜け道が多く、家のプライベートな道と混在している。蔵や家を取り壊され、空き地や畑となっている場所が多く見られる。

3. 第3ブロック (本町)

足助川の最も大きい曲部に位置するこの区画は、敷地は街道側から放射状になっており、川側の空間には面積の余裕が生まれ、畑として使われ

ている場所が多い。川沿いには樹木が植えられ、並木となり、畑や庭の植栽と共に洪水の時の緩衝地帯となっている。石垣は平均0.4mと川沿いの護岸としては最も低く、幅の広い遊歩道と共に川から街道までの高低差が小さい。また、紙屋鈴木家という豪商が過半の敷地を所有していたことから、他の区画では見られない間口の広い敷地割となり、川側の間口の広さから石垣を切るような形で玄関空間が幾つか作られている。

4. 第4ブロック（本町 田町）

最も建物の密度が高く、多くの商家が集まり、まちの政治、経済の中心であった区画。街道側に主屋、川側に蔵、離れなどの付属屋が配置されている。狭い敷地の中を最大限利用するため、主屋と付属屋をつなげるナカドオリが通っている家が多く、建物が川側に張り出している。このナカドオリが川まで繋がっている家が多く、川側の建物立面に扉や道が見られ、川と繋がっている生活が伺える。また、川と敷地との高低差が大きく、まちで最も高い石垣となっている。石垣は敷地ごとに種類が異なり、変化のある景観的要素となっている。川側階段は、敷地の狭さから遊歩道に突出して、川に平行につく形態が多く見られる。庭をとるスペースがないため、植栽は少ないが、階段やベランダに植木鉢を置く家が多い。

5. 第5ブロック（田町 字石橋）

この区画以东は旧伊那街道が川沿いになる。川と敷地の高低差が小さくなり、敷地ごとの石垣は無くなり、区画一体の地盤全体を支える計画された一体となる護岸が続いている。川側に街道があることで、玄関も川側となっている。また、区画の南北で大きな高低差があり、南北で敷地が分かれている。川側から見る立面はその高低差により複雑に積層して見える。屋根の大半は平入りであり、建物の密度は低い。紙屋鈴木家と共にまちの政治・経済の中心であった小出家が区画の右側にあり、川側に積層した平入り屋根が特徴的である。小出家以外の区画の建物は明治以降に建てられた建物となっていて、江戸時代からの町並みが残っている本町とは異なり、明治以降新道が開通してから形成された町並みである。

6. 第6ブロック（田町 字岩崎 小出家以东）

明治中期以降、旧伊那街道の上に新道が作られたことで、形成された新しい区画。急斜面の崖地を開削して、懸造りで建物が建てられている。敷地が南北に狭いため、川に平行に建てられ、戦後に建てられた建物が大半を占めている。旧伊那街道側には玄関はなく、新道側に玄関が設けられている。旧伊那街道から新道まで抜け道もあるが、斜度が大きいため、蹴上の高い階段が付いている。

5. まとめ・今後の展開

足助の町並みは、伝統的な町でよく見られる町全体が同じ景観の反復で形成された町並みとは異なり、景観の変化が大きく、時代も混在した建物が建ち並ぶ凹凸のある空間が特徴的である。そんな景観の中に複数のまとまりを明確にすることで、これからの足助のまちづくり、特に修景の進んでいない川側空間で、修景を行う際に、より足助の空間と暮らしを継承していけるのではないかと考える。

また、調査でまちの人々と話す中で、街道沿いの主屋の改修が進み、町並みは綺麗になっているが、生活感が感じられなくなってきていることや改修後も空き家状態になってしまうなどの現状を知った。このような表層だけで中身の伴わない改修が多いことから、保存・修景の計画に改善の必要性があることがわかった。



Fig. 8 街道面のみの改修/整備された街道

今後の展開としては、伝統的建造物群保存地区保存条例による修景の現状と修繕後の使われ方の詳細を把握し、問題・原因の探求を行う。修士設計では、調査より得たまちの空間構成、現状を基に、伝統的な空間・暮らしの根本となる部分を残しながら、現代に沿った形で再構築し、町の人々の生活も共に継承していける空間の設計提案をしたいと考えている。

「参考文献」

- 1) 足助 伝統的建造物群保存対策調査報告書（2010）
- 2) 足助の町並-伝統的建造物群保存地区調査-（1978）
- 3) 足助地区工事立会埋蔵文化財調査報告書（1990）
- 4) 旧紙屋鈴木家住宅調査報告書（2013）
- 5) 豊田市文化財課HP（2000）
- 6) 足助まちづくりガイド（1998）